まえがき――『資本論』形成史を探究して

この本は、雑誌『経済』での六回の連載論文を一冊にまとめたものですが、まとめるに当たって補強の作業をかなり大きくおこないました。研究を進めながらの連載でしたので、論点によっては予備的な論及のたりなかった部分やよりたちいった解明を必要とする部分などがあちこちに残り、全編にわたって整理や加筆をしたものです。その結果、分量も一回分を超えるほど増えた勘定になりました。

また、研究の流れをわかりやすくするために、「序章　経済学変革の画期をなした諸発見」のあと、全体を

Ⅰ　経済学上の発見を報告する――マルクスからエンゲルスへの手紙

Ⅱ　恐慌論の探究と展開――運動論の発見を軸に

Ⅲ　「独自の資本主義的生産様式」――この規定の誕生と発展を追跡する

Ⅳ　『資本論』第一部完成稿の研究

に分け、最後に「終章　いわゆる『プラン問題』とマルクスの経済学説の発展」を置いて結びとす

る、という編成にしました。

一

この著作の主題は、『資本論』の形成史ですが、私が、ぼんやりとしたものにしろ、この点に関心をもったのは、『資本論』に触れ始めたごく最初の頃にさかのぼります。

古書店で戦前版の『資本論』（高畠素之訳）を買いそれを手にしたのが、旧制高校生だった一九四七年。長谷部文雄氏の新訳本（日本評論社）が出始めたのも同じ頃でした。手にしたと言っても、ページをめくるごとに次々と出てくる経済学の諸概念、諸規定をふうふう言いながら追うのが精いっぱいで、理論全体の脈絡をつかむことなどまだ問題にもならない勉強ぶりでした。

その最初のころから、私は、マルクスのこの大著の「成立過程」に興味をひかれました。同じ頃に読んだ『経済学批判』の「序言」（一八五九年）で、マルクスが当初に描いていた経済学著作の全構想を知り、それが、いま手にしている『資本論』の構成とあまりにも違っているのに驚いたことがきっかけだったと思います。そこから『資本論』にいたるまでに、マルクスの思考にどのような変化や発展があったのか。まだ『資本論』そのものの中身もろくにつかめないでいる時期なのに、なぜかその問題に深い関心をかきたてられたのです。

もちろん、この問題に取り組むには、『資本論』そのものの理論内容とその組み立てを、ともかく自分で納得できるところまでつかみきることが先決問題ですし、何よりも、『資本論』に先立つマルクスの諸草稿に接してこれを読み解くことが必要です。当時の私には、そんな条件はまったくありませんでしたから、以後長い間、私のなかでは、それは問題意識のレベルにとどまっていました。

私が、『資本論』の形成史というこの問題に、ともかく取り掛かってみようと考えたのは、いまから十数年前、一九九〇年代も半ばを過ぎてのことでした。

その頃には、問題のマルクスの諸草稿も、マルクス、エンゲルスの新たな本格全集『新メガ』の海外での発行（一九七五年刊行開始）を受け、『資本論草稿集』（資本論草稿集翻訳委員会訳、全九巻、大月書店）という形で、『資本論』に先立つ主要な諸草稿の日本語版刊行も終わっていました〔＊〕。

＊ **諸草稿の日本語訳の刊行**　『資本論』の諸草稿の主要なものは『五七～五八年草稿』と『六一～六三年草稿』ですが、『五七～五八年草稿』の最初の日本語訳は、『経済学批判要綱（草案）』（高木幸二郎監訳、全五分冊、大月書店）として一九五八～六五年に刊行されました。その後、『新メガ』を底本にした『資本論草稿集』が『五七～五八年草稿』と『六一～六三年草稿』およびその間の諸文献も含めて、一九七八年に刊行が始まり一九九四年に完結しました。

なお、それに続く草稿である『六三～六五年草稿』（不破による呼称ですが、その内容は本文三七ページの注を参照してください）についても、第一部の「第六章　直接的生産過程の諸結果」と第二部第一草稿は、やはり大月書店から、前者はマルクス・エンゲルス選集や国民文庫版で、後者は『資本

の流通過程』（一九八二年）として刊行されています。

二

私が最初に企てたのは、一九九五年、エンゲルス没後一〇〇周年の記念の年を迎えた機会に、〝『資本論』での研究と刊行にエンゲルスがどう関与したか〟という問題を設定して、この角度から『資本論』成立の歴史をたどる、ということでした。

これが、一九九五～九六年に雑誌『経済』に連載し（一五回）、九七年に上下二巻の著作にまとめた『エンゲルスと「資本論」』（新日本出版社）です。マルクスの研究の発展過程そのものを主題とせず、エンゲルスの関与という、いわば『資本論』成立史の一側面に角度を絞っての追跡でしたが、一八四〇年代のパリやブリュッセルでの経済学研究の開始から、ロンドンでの本格的な研究、諸草稿の執筆、『資本論』第一部の公刊と続巻完成への努力、さらにマルクス死後のエンゲルスによる第二部、第三部編集など、『資本論』をめぐる過程の全体をあらためてたどり直したことは、私にとって、その後の研究への大変有益な出発点となりました。

エンゲルスの関与という主題からは若干脱線のきらいはありましたが、この著作でかなり力を入れて取り上げた問題の一つに、七〇年代以後にマルクスがたてはじめた第三部の新構想の問題があります。マルクスは、信用論では、第三部の現草稿執筆後に顕著になった信用制度の巨大で急速な発展に注目し、また地代論では、ロシアの共同体の問題を含め、資本主義以前からの土地所有の歴史的発展に強い関心を寄せ、それらの新しい主題を織り込んだ構想をたて、そのための多くの資料を収集していました。しかし、これらの構想は、結局、執筆にまで進まないまま、一八八三年にその生涯を終わりました。

私はこの新構想の壮大さに注意をひかれ、それを「七〇年代プラン」と呼んで、残された材料からその内容の推定につとめたのですが、そのかたわら、五七～五九年のプランに端を発したいわゆる「プラン問題」についても、マルクスが経済学研究の最後の時期に、これだけの包括的な内容を第三部に取り入れようとしていたことは、『資本論』の四部構成（予定していた『第四部　学説史』を含めて）がマルクスの経済学著作の最終構想だったことを示唆するもの、と考えたものでした。

三

『資本論』の形成史に挑戦する私の第二回目の試みは、二〇〇二年に雑誌『経済』に連載し（一〇回）、二〇〇三年に上・中・下三巻にまとめた『マルクスと「資本論」――再生産論と恐慌』（新日本

出版社）でした。

この時は、恐慌と再生産論の問題に角度を絞って、マルクスの全過程の足跡をたどることを企てました。それまで、マルクスの恐慌論といえば、貨幣論で展開されている「恐慌の可能性」についての命題と、第二部、第三部に示されている「恐慌の根拠」についての命題と、この二つを柱にして説明されるのが普通でしたが、私には、恐慌という資本主義的生産の激動的な運動形態の解明にあたって、マルクスがそこにとどまっていたとは、どうしても思えなかったのです。その疑問を、立ち入った研究への具体的な意欲に発展させる直接の契機になったのは、マルクスの次の一文でした。

「問題はむしろ次の点にある。すなわち、すべて現代の工業的国民のあいだで、人々が、きわめて見えすいた幻想にまどわされて、いわば周期的に自分の財産を手ばなす発作にとらえられるのは、しかも一〇年ごとにくりかえされるこっぴどい警告にもかかわらずそうなるのは、いったいなぜであるか、ということである。ほとんど規則的に、一般的な自己幻惑、過度投機と仮空信用のこうした時期を再生産する社会的諸事情は、いったいなんであるか?」（『マルクス・エンゲルス全集』〔大月書店、以下全集〕⑫五四二～五四三ページ）。

これは、一八五七～五八年恐慌の終結後の五八年一〇月、マルクスがアメリカの新聞『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』に掲載した経済論説「イギリスの商業と金融」のなかの一節です。イギリス議会下院委員会の恐慌問題の報告書が、恐慌の原因は「過度の投機および信用の濫用」にあったと結論したのを読んで、マルクスが、問題はそんなところにあるのではない、「過度の投機および

信用の濫用」がなぜ一〇年ごとに繰り返されるのか、その原因を究明するところに恐慌問題で探究すべき中心問題がある、こういう痛烈な批判の言葉を投げつけたのでした。

この文章を読んで、私が求めていた問題は、まさにここにあったと直感しました。資本主義的生産はどうして恐慌という破局を周期的な必然とする運動形態をとるのか、恐慌論でいう恐慌の「根拠」――生産と消費との矛盾――が周期的な恐慌を伴う産業循環を生み出すのは、資本主義経済のどういう仕組みによってなのか。マルクスは、〝問題はここにあるのだ〟と言って、核心を避けて常識的な一般論に終始したイギリス議会に批判の言葉を投げつけたのです。そうである以上、この問題にたいするマルクス自身の回答にこそ、マルクスの恐慌論の核心があるはずだ、私はこう考えて、マルクスが経済論説で提起した問題を「恐慌の運動論」と呼び、その探究を志したのです。

この探究には、できあいの回答はありませんでした。しかし、こういう問題を提起したマルクスが、自身の回答を持たないままで『資本論』の公刊に踏み出すはずはありません。その回答の少なくとも基本点は、『資本論』とその草稿のなかに必ず書かれているはずだ、私はそのことを確信して、マルクスの経済学の発展過程を「再生産論と恐慌」という一点に絞って総ざらえし、そのなかにマルクス自身の回答を求めることにしたのです。それが、二〇〇二～〇三年に執筆した『マルクスと「資本論」』の主題でした。

この主題にせまるために、私は、『五七～五八年草稿』、『六一～六三年草稿』をはじめとするマルクスの諸草稿を、執筆の順序で読み続けました。これらの草稿は、日本語版が出版される度ごとに、

またその後も何回か目を通してきたものばかりですが、その全体を歴史的な順を追って、しかも一定の目的意識をもって読むのは、はじめてでした。そして『資本論』そのものにも、〝歴史のなかで読む〟という同じ読み方で取り組みました。

その結果、たいへん多くのことが見えてきました。なかでも、大きな収穫として今も印象に残っている若干の点をあげておきたいと思います。

第一の収穫は、なんといっても、第二部第一草稿（一八六五年前半執筆）で、マルクスが「恐慌の運動論」の基本をなす運動形態を発見した現場に到達したことです。それは、期待をかけていた再生産論ではなく、資本の循環論という思わぬ場所にありました。発見された運動形態に、マルクスはこの草稿では「流通過程の短縮」という呼称を与えました。マルクスは、それ以前には、恐慌の可能性が現実性に転化してゆく過程では、信用や世界市場が重要な契機になることを予想していましたが、周期的な恐慌を現実の問題にする基本的な契機は、商人資本の介入によって商品の販売が現実の需要から独立するというごく身近なところにあったのでした。

この発見以後、『資本論』やその草稿での恐慌論の叙述は、様相を一変させます。

第二の収穫としてあげたいのは、マルクスの草稿の書き方について、その特徴の一つを会得したことです。それは、『六一～六三年草稿』で、アダム・スミスの経済学説を読む過程で得たものでした。資本の生産物がどういう相手によって購買されるのか、つまり実現問題に取り組んだ部分なのですが、これまで何回読んでもなかなかマルクスの思考の筋道がつかめない、私の難所の一つでした。と

ころが、読み解きの努力を繰り返しているうちに、このくだりは、マルクスが自分の研究の到達点を記述したものではなく、問題に挑戦してゆく試行錯誤の過程をそのまま記したのではないかということに、はたと気が付いたのです。その視点で読むと、問題の解決を求めて挑戦を繰り返し、幾度も迷路に入り込みながら、最後に正解にたどり着くマルクスの思考の過程が、ありありと記述されていることがわかりました。

いろいろ形は違いますが、マルクスの草稿には、研究して到達した結論を理論的に展開してみせる部分とともに、書きながら自分の思考を発展させてゆくその過程を記述した部分が少なからずあります。このことを実体験的に理解したことは、その後の草稿を読み解く上で大きな力になったと思います。

同じ『マルクスと「資本論」』の中で取り組んだ拡大再生産論の部分の解読も、その実例の一つです。この部分をマルクスの試行錯誤を経て解決に到達した過程ととらえ、マルクスの原草稿の大谷禎之介氏による訳文（『経済志林』所収）とも対照しながら読むことによって、この領域でのマルクスの理論的苦闘の経緯とそれを通じて得た成果（拡大再生産の均衡条件の解明）の意義をはじめて明確にとらえることができました。

第三の収穫は、第三部の信用論の分野にありました。第三部の第五篇は、マルクスがはじめて信用制度論に本格的に切り込んだ、『資本論』の非常に重要な部分ですが、その論述の順序にはマルクスらしくない非論理的なところがあり、部分的な理解はできても、全体的な構成が私には非常にわかり

にくい部分となっていました。『新メガ』でマルクスの草稿そのものが公刊されている時点でしたから、思い切って、マルクスの草稿そのものに立ち返ってみると、マルクスの考察の流れが、『資本論』の現行版とは違った形で見えてきました（この時も、やはり『経済志林』に連載されていた大谷氏の日本語訳に大いに助けられました）。そういう読み方をすることで、そこで記述されている経済循環（恐慌を節目とする）における信用の役割についての考察も、マルクスがそれに先立って第二部第一草稿で解明した「恐慌の運動論」の具体化という角度からとらえ、その意味を明らかにすることができました。

こうした経験からも、エンゲルスが編集した第二部、第三部、とくに第三部第五篇の信用論については、現行版を固定的に見ないで、マルクスの草稿に立ち戻って研究することが重要だと思っています。

なお、恐慌と再生産の理論の発展史を主題とした『マルクスと「資本論」』の執筆とほぼ並行して、二〇〇二年一月～一二月に、日本共産党本部で「代々木『資本論』ゼミナール」を開き、『資本論』全三巻の全体にわたる講義に取り組みました（二一回。その後、『「資本論」全三部を読む』〈七分冊、〇三～〇四年、新日本出版社〉として刊行）。ここでは、研究の視野を大きく広げることが要求されました。特定の問題に焦点をしぼりながら『資本論』の歴史を主題とする仕事と、『資本論』の全領域にわたる包括的な研究と、それぞれ苦労はありましたが、この年に二つのことに並行的に取り組んだことは、縦糸と横糸式の相乗作用があり、その後の研究の基礎を固め広げる上で、貴重な意味をもつ経験となりました。

四

それからの数年間は、私の理論活動は、『資本論』の形成史という問題意識からは遠ざかっていましたが、今から振り返ると、この間に取り組んだ二つの分野での活動は、大きな意味で、今回の研究の土壌を豊かにする役割を果たすものでした。

第一は、経済学にとどまらないより広い領域で、マルクス、エンゲルスの理論的業績を歴史的に振り返る仕事をすすめたことです。

その一つは、マルクス、エンゲルスの代表的な著作を、『古典選書』（新日本出版社）に収録された文献を中心に年代順に、紹介し解説する仕事で、雑誌『月刊学習』に二〇〇六年五月号から〇九年三月号まで、三五回連載しました（〇八～〇九年に『古典への招待』上・中・下三巻として刊行）。これは、多くの人々が古典を読むのを応援するために立てた企画でしたが、マルクス、エンゲルスがそれぞれの著作を執筆した背景をあらためて探るとともに、二人の思想・理論の歴史的な発展を、世界観、経済学、社会主義論、革命論などの全体にわたってたどりなおす研究ともなり、私自身にとって大変大きな勉強になりました。

もう一つは、〇六年、〇七年に日本共産党本部で「科学的社会主義研究講座」を開き、〇六年一〇

〜一二月には、エンゲルス『フォイエルバッハ論』をテキストにして科学的社会主義の世界観を、〇七年一〇〜一二月には、マルクス、エンゲルスの革命論の歴史を講義したことです。革命論の講義は、二〇一〇年に『マルクス、エンゲルス　革命論研究』上・下二巻として刊行しました（新日本出版社）。

こうして、マルクスの学説の総体を歴史的な発展のなかでとらえるこの仕事を通じて、私は、理論のあらゆる分野で、〝歴史のなかでマルクスを読む〟ことの重要性をあらためて痛感しました。とくに革命論におけるマルクス、エンゲルスの学説の歴史的発展を総ざらえする仕事は、私にとってもはじめての企てでした。四八年革命から、インタナショナルの運動経験を経て七〇年代以後のヨーロッパ諸国の革命運動への指導的な助言、そして多数者革命の定式化にいたる運動理論の発展を、歴史的な発展の筋道と節目を押さえながら総括したことは、『資本論』研究にも大きな意義をもつことでした。

第二は、〇八年以後、党本部の有志による「資本論草稿輪読会」を続けたことです。この研究会は、二〇一一年一〇月に最後の会を終えましたが、足掛け四年かけて、『五七〜五八年草稿』と『六一〜六三年草稿』を通読しました。自分一人で読む時には、当面の関心や必要にかられて重点的な読み方をしがちなものですが、この研究会ではそうはゆかず、否応なしに草稿の全文を通読することになります。このことは、マルクスの学説の進展の推移をつかみ直す絶好の機会となり、理論展開のさまざまな「内的紐帯（ちゅうたい）」が随所に見えてきました。

五

『資本論』の形成史への今回の取り組みは、以上のような経緯に立っておこなったものです（三回目になります）。

ことの経過を言うと、前二回の場合とは違って、今回は、最初から計画を立てて研究に取りかかったわけではありませんでした。問題意識だけは依然として持っていましたから、二〇一〇年の秋、読売新聞の連載「時代の証言者」の取材のなかで「理論研究の今後の課題は」と問われた時、スターリンの大国主義の歴史と『資本論』の形成史との二つをあげました（「読売新聞」一二月八日付）。しかし、その時には、あくまで大まかな将来展望という話で、まだ具体的な研究計画を持っていたわけではなかったのです。

その後間もなくして、雑誌『経済』の編集部から、一一年五月号にマルクス経済学の特集を企画しているので参加しないか、という話がありました。「では何か書きましょう」と引き受けて、最初に考えたのは、〇二〜〇三年の探究（『マルクスと「資本論」』）を思い返しながら、『資本論』の形成過程にかかわるいくつかの問題点を、これからの研究課題として提起する、という比較的短い論文の寄稿という案でした。これならあまり苦労しないでも責任は果たせるし、先々本格的にこの問題に取り

掛かる時の準備作業にもなる、と思ったのです。

それで、論文のレジメを考え、形成過程の特徴について、これまでの研究で気がついたいくつかの点を前説的に述べたうえで、次のような問題提起をして論文の締めくくりにするというプランを立てたのです。いまレジメのその部分を取り出してみると、次の通りです。

「私がいま最も興味をひかれている謎は、『資本論』の形成過程をめぐる一連の謎である。この一連の謎の解明は、『資本論』の内容を読み解く上で、必ず重要な意味を持つに違いない、と予想している。

1. 最初のプランの意味。とくに、Ⅰ・資本とⅢ・賃労働で、資本―賃労働の関係を二度論じることにしていたが、Ⅲ・賃労働では、この関係のどういう側面・内容を研究の対象とするつもりだったのか。
2. 『資本一般』の枠組みを、いつ、なぜ捨てたのか。
3. 『六一～六三年草稿』の執筆を、なぜ機械論の中途で中断したのか。
4. そのあと、『剰余価値に関する諸学説』の執筆に移ったのはなぜか。この研究は、マルクスの理論形成において、どういう意味を持ったか。
5. 六三年に執筆を再開した機械論の続稿で、マルクスが新たに開拓した論点はなんだったか。それが、『資本論』第一部の最終稿の形成にどういう意味を持ったか。
6. 六四年に執筆した『資本論』第一部草稿が、『第六章　直接的生産過程の諸結果』しか残っていないのは、なぜか。また、この章はなぜ残ったのか。
7. 『資本論』第三部草稿の執筆には、中断の時期がある。中断前の草稿と中断後の草稿には、いくつかの大きな相違点があるが、その相違点は、マルクスの理論のどういう発展を示すものか。
8. マルクスは、六三年時点のプランでは、第三部に含める予定のなかった信用論を、六五年執筆の第三部草稿では独自の大きな章に位置づけた。このプラン変更は、何を理由とするものだったか。

『資本論』の執筆過程にかかわるこれらの謎解きで、私の探究がある地点に到達したときには、前回のように『再生産論と恐慌』に問題を限定せず、より広い意味で『資本論』の形成過程を、私なりにまとめてみたいと思っている。」

ここに列挙した問題は、多くは前回の研究のさいに、そこに解くべき問題があることを自覚しながら解決を今後に残してきた問題で、その後も折に触れて考えながら、手つかずにしてきたものでした。

ところが、こういう形であらためて問題を提起してみると、どの問題もいま取り組めば解決に到達できそうな気がしてきたのです。回り道のようにも見えるこの数年来の視野と領域を広げた理論活動の中で、研究する側の主体的条件に、自分でも意識しない変化が生まれていたのかもしれません。おのずから、短い論文という最初の構想は捨てて、この機会によりたちいった研究をやってみるつもり

になり、書き始めてみると、確かに〇二～〇三年には見えなかったさまざまな脈絡がよく見えてくるのです。ですから、普段から考えてきたことというより、自分で提起しようとしていた諸課題について、執筆しながら解決の努力をし、そのことがまた次の前進に道を開くという形で連載を続け、結局、六ヵ月にわたる連載になりました。

この研究の成果がどんなものであるかは、本書そのものを見ていただく以外にはないのですが、連載を終えた時、私自身が新たな到達点として強く実感した諸点について、述べておきたいと思います。

（一）まず、『資本論』第一部の完成稿の問題です。これまでの『資本論』形成史の探究でも、この完成稿の成立過程に特別の焦点を当てて研究したことはなく、その完成の最後の時期にマルクスが新たにどのような考察を展開したかという問題は、私にとっても大変新鮮な意味をもつ課題でした。この点の探究を、機械制大工業の段階の本格的な研究から蓄積論の壮大な展開、さらに資本主義の「弔鐘が鳴る」社会変革の展望の叙述まで進めた時、この部分が持つ、これまでの私の理解を超えた深い意味と、マルクスが第一部完成稿の成立に注ぎこんだ集中的努力の大きさに、あらためて心を打たれたものでした。この集中的努力によってこそ、『資本論』の理論的な威力――資本主義社会の必然的没落への過程を、世紀を越えて分析・解明できる力が仕上げられたと言っても、決して言いすぎにはならないでしょう。

『資本論』第一部完成稿という到達点にたって、『五七～五八年草稿』と『六一～六三年草稿』から

この地点にいたる過程をふりかえると、そこには理論が飛躍するいくつかの契機を見ることができますが、なかでも重要な理論的飛躍の峰が、恐慌の運動論の発見（一八六五年）と、「独自の資本主義的生産様式」という新規定を駆使した機械制大工業の本格的研究（一八六六年）にあったことがわかります。そこにはマルクス自身の資本主義観の転換という大きな問題も含まれていました。

（二）さらに、今回の研究の過程で、マルクスの経済学説の発展の流れと革命論の歴史的展開の流れとのあいだに、いままで見ていた以上の密接な関連があることを痛感した点は、強く指摘しておきたいことの一つです。エンゲルスはマルクス「フランスにおける階級闘争」の序文（一八九五年）で、自分たちの革命論の発展の背景として、一九世紀後半の資本主義経済の発展と階級闘争の様相の変化を指摘していますが（全集㉒五一〇～五一一ページ、『古典選書　多数者革命』二五〇～二五一ページ）、『資本論』完成稿にいたる経済学説の前進的な展開も、同じ状況を背景に革命論の発展との内面的な連関のもとに進行したものでした。

マルクス、エンゲルスの革命論については、二人の死後、系統だった本格的な研究がなく、とくにスターリン以後は、二〇世紀以前の時期の古い理論として意図的に忘れ去られてきた歴史があります。それだけに、革命論における二人の理論的遺産の継承という問題は、今日のマルクス研究にとって重要な課題であり、『資本論』での展開の理解にもかかわってくる課題として位置づけられるべきだと考えます。

（三）最後にあげたいことは、今回の研究で、当初の「五七～五九年プラン」から『資本論』の三

部構成（第四部『学説史』は別として）に発展してきた道筋とその論理をたどりたいという年来の宿題に、私なりの結論を与えることができたことです。結論的にいえば、著作構想のこの進展は、最初「資本一般」という枠組みで展開するはずだった「資本の生産過程」、「資本の流通過程」、「資本と利潤」の三篇構成が、マルクスの経済学の内容と方法の前進とともに、その後に予定した諸項目を吸収して資本主義的生産の主要な全側面を包括する発展をとげた結果、実現したものでした。

この問題は、「終章」で研究の全体を総括する形でまとめてみました。

マルクスの『資本論』形成の過程については、『新メガ』での草稿刊行が完了に近づきつつある今、さらに多くの研究がおこなわれるでしょうが、今回の研究での私の提起が、今後のより広くより深い研究の一つの足がかりともなることを願って、結びとしたいと思います。

二〇一一年一二月

不破哲三

『資本論』はどのようにして形成されたか　目　次

まえがき——『資本論』形成史を探究して　1

序章　経済学変革の画期をなした諸発見 …… 31
経済学の「まるまる完全な革命」　31
注目される四つの発見　37

I　経済学上の発見を報告する
——マルクスからエンゲルスへの手紙—— …… 41

第一章　一般的利潤率と絶対地代の発見（一八六二年） …… 42
「剰余価値に関する諸学説」を読む　42
一般的利潤率についてのそれまでの考察　45
マルクスによる地代論の変革　48
ここに科学的経済学の試金石の一つがあった　53
地代論の「資本一般」への組み込み。その波紋　56

第二章　「発生論的方法」の確立 …… 60
地代論への取り組みと経済学の方法論　60
スミスの二面性にたいするマルクスの評価　62
リカードウの経済学はどこに方法論的な弱点があるのか　64
方法論についてのマルクスの諸定式　66
『資本論』三部構成の意義づけにも関連する問題　69

第三章　マルクス独自の「経済表」への到達（一八六三年）
——新分野・再生産論に道を開く—— …… 72
実現問題は「資本一般」段階の〝立入禁止〟地域だった　73